

## 第1章

## 財務・会計とは

会計は、単に利益を計算するためのものではない。飛行機のコックピットの計器盤に例えられるように、会社がどの位置にいて、どこに向かって進んでいるのかを把握する道具であり、経営者はその道具を使うことで、会社を正しい方向に導くことができる。このため、経営者についてアドバイスをする立場にある中小企業診断士においては、会計を理解し、どのようにして数字が作られるのか、そこで算定される数字はどんな意味を持つのかといった知識が不可欠となる。本章では、その前提知識として、会計の種類と決算書の基本構造について確認する。

## 1 財務・会計とは

## 1 はじめに

財務・会計の学習領域は、会計（アカウンティング）と財務（ファイナンス）に分かれる。ここでは、財務・会計の科目を攻略するために必要な前提知識としてこれら2つの内容の概要について説明する。

## 2 会計（アカウンティング）とは

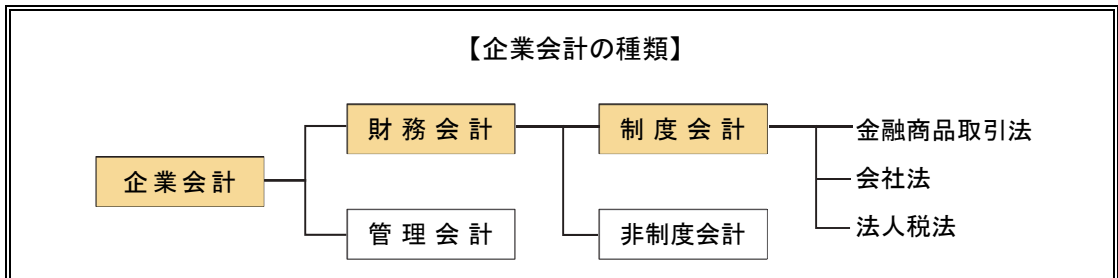
重要度 B

## (1) 意義

会計には、家計や企業会計、国家の公会計などの種類があるが、中小企業診断士試験では、企業会計を指す。ここで、企業会計とは、企業の経済活動を記録、測定し伝達する手続きをいう。

## (2) 種類

企業会計は、その伝達する相手により「財務会計」と「管理会計」に分類される。



## 3 財務会計

重要度 B

## (1) 意義

財務会計とは、企業外部の利害関係者に対し、企業の経営成績と財政状態及びキャッシュ・フローの状況を報告することを目的とする会計をいう。

財務会計では、外部利害関係者に対して報告するため、複式簿記により記帳され、一定のルール（会計基準など）に基づき、会計処理が行われる。

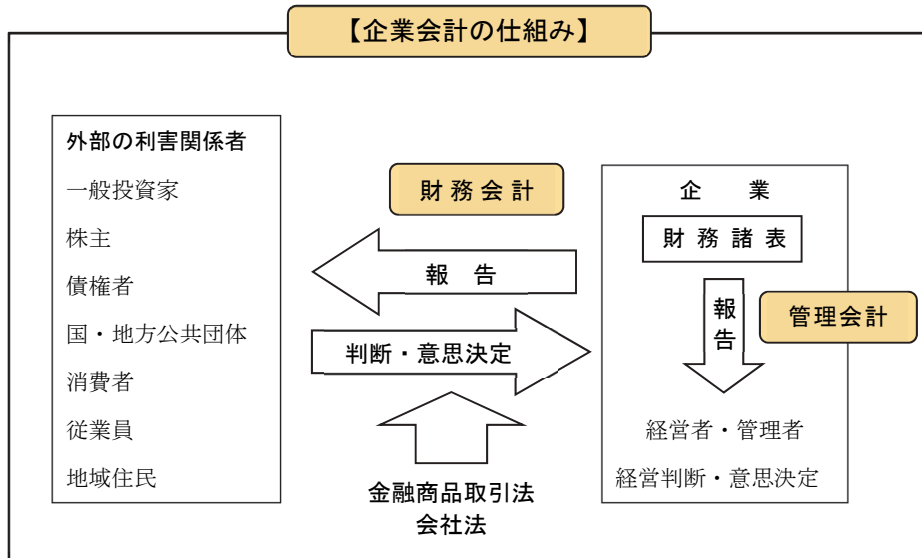
## (2) 報告手段

報告手段は主として、損益計算書、貸借対照表及び株主資本等変動計算書等である。

## 4 管理会計

重要度 B

管理会計とは、企業内部の経営者等に対して、経営管理に役立つ会計情報を提供することを目的とする会計をいう。管理会計では、内部利害関係者に対して報告するため、一定のルールなどに縛られることなく、企業の都合により行われる点に特徴がある。



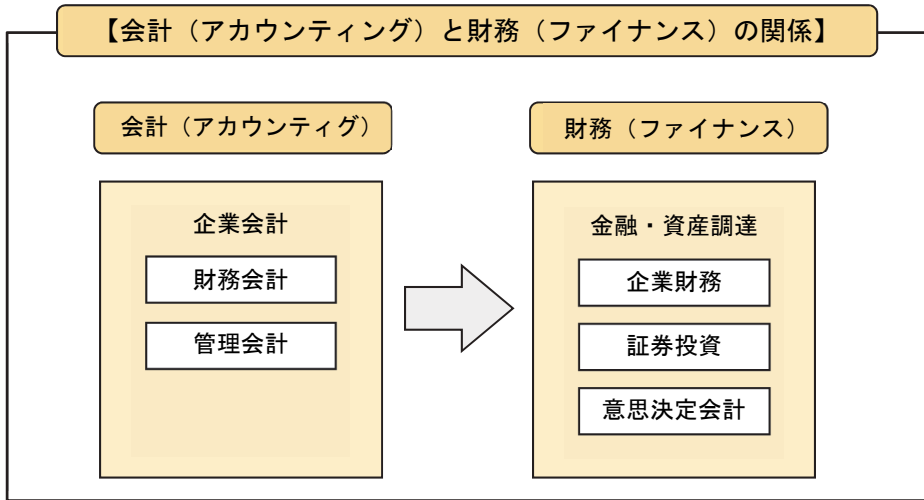
## 5 財務（ファイナンス）とは

重要度 B

### (1) 意義

財務（ファイナンス）には下記のように3つの意味があり、中小企業診断士試験では主に3つ目の意味となる。

3つの意味	内容
①「資金」や「財源」という意味	事業などを行うために必要なお金のことを「ファイナンス」といい、「必要なファイナンスを確保する」という場合はこの意味となる。
②「財政」や「財務」という意味	事業活動などのためのお金を管理することも「ファイナンス」という。
③「金融」や「資金調達」という意味	「お金を供給すること」と「調達すること」のどちらも「ファイナンス」であり、「ファイナンスを行う」という場合はこの意味となる。



## 6 財務諸表の概要（アカウンティング）

**重要度 A**

企業会計のうち「財務会計」では、企業の財政状態や経営成績を報告する報告書を作成することを目的とし、そのための記帳技術として、複式簿記を用いている。複式簿記は、①資産、②負債、③純資産、④収益、⑤費用の5つの勘定を使い、それらを借方と貸方に振り分けることで会計帳簿に記録していく技術であり、最終的にその会計帳簿から貸借対照表や損益計算書という財務諸表を作成することができる。また、企業におけるキャッシュの流れを報告するキャッシュ・フロー計算書についても作成される。

### (1) 貸借対照表の概要

貸借対照表は、企業の財政状態を明らかにするために、一定時点（決算日）における全ての資産、負債及び純資産を記載して、株主、債権者その他の利害関係者に示すために作成された報告書である。この貸借対照表は主要財務諸表の1つであり、Balance Sheet (B/S) と呼ばれる。

#### 【貸借対照表の構成要素】

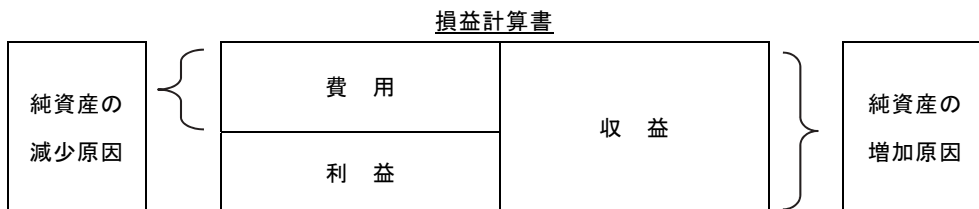


貸借対照表は、①資産（財貨や権利等）、②負債（借金等）、③純資産（元手や利益等）の3つの要素を使うことで「一定時点（通常は事業年度末）における財政状態（ストック）」を明らかにすることができる財務諸表である。

## (2) 損益計算書の概要

損益計算書は、企業の経営成績を明らかにするために作成される財務諸表である。一会計期間に属する全ての収益とこれに対応する全ての費用とを記載し、当期純利益（損失）を表示する。この損益計算書は、Profit and Loss Statement (P/L) と呼ばれる。

### 【損益計算書の構成要素】



損益計算書は、①収益（売上や手数料等）、②費用（原価や経費等）の2つの要素を使い、両者の差額として利益を計算することで、一会計期間の経営成績を報告することのできる財務諸表である。

## (3) キャッシュ・フロー計算書の概要

キャッシュ・フロー計算書は、一会計期間におけるキャッシュ・フローの状況を報告するために作成するものである。すなわち企業の資金獲得能力（どのように資金を産み出しているか、またどのように資金を利用しているのか）に関する情報を利害関係者に提供することを目的としている。

キャッシュ・フロー計算書では、次のように企業活動の態様に基づいた区分表示を行う。

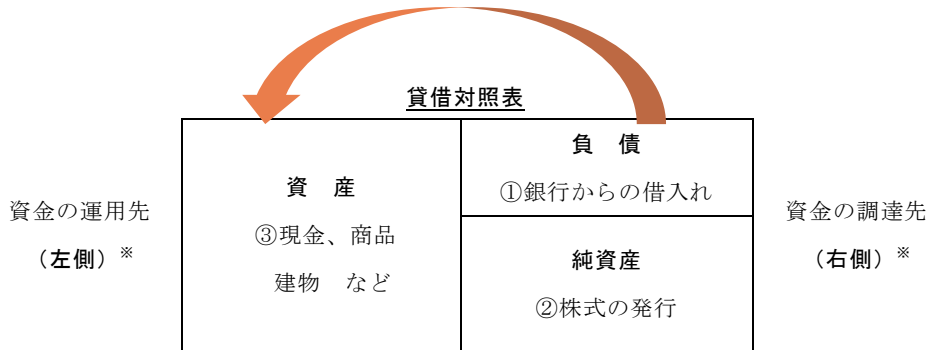
<u>キャッシュ・フロー計算書</u>		
自×年×月×日 至×年×月×日		
I	営業活動によるキャッシュ・フロー	××
II	投資活動によるキャッシュ・フロー	××
III	財務活動によるキャッシュ・フロー	××
IV	現金及び現金同等物に係る換算差額	××
V	現金及び現金同等物の増加額	××
VI	現金及び現金同等物の期首残高	××
VII	現金及び現金同等物の期末残高	××

#### (4) ビジネスと簿記、財務諸表の関係

##### ア 会社活動と貸借対照表の関係

ビジネスにおいて、その活動をするためにはまず「資金」が必要である。

株式会社は、この「資金」を調達するために、①銀行からの借入れ、②株式発行という2つの方法により主に資金を調達する。さらに、③会社は調達した資金を商品や備品、建物などに投資をする。この会社活動と貸借対照表の関係を示すと下記ようになる。



※ 貸借対照表の左側（資産）の金額は、右側の金額（負債＋純資産）と一致する。

##### (計算例①)

当社は、会社設立にあたって、銀行から100万円、株式発行により200万円の資金を調達し、当該資金を全額使って、販売する商品を仕入れた。このときの貸借対照表を作成する。

**貸借対照表**

資金運用先合計 300万円 (左側)	<b>資 産</b> 商品 300万円	資金調達合計 300万円 (右側)
	<b>負 債</b> 借入金 100万円	
	<b>純資産</b> 資本金 200万円	

上記、貸借対照表の右側をみることで、調達した資金300万円について、100万円が借金であり、200万円が出資してもらった金額であることが分かる。

次に、左側を確認してみると、集めた資金300万円の運用先が分かる。商品300万円となっていることから、調達した資金300万円は商品として運用（投資）されている。

(計算例②)

当社は、仕入れた商品 300 万円を 400 万円ですべて売却し、現金で受け取った。このときの貸借対照表を作成する。

貸借対照表								
資金運用先合計 400 万円 (左側)	資 産 現金 400 万円	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="text-align: center;">負 債</th> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">借入金 100 万円</td> </tr> <tr> <th style="text-align: center;">純資産</th> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">資本金 200 万円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">利 益 100 万円</td> </tr> </table>	負 債	借入金 100 万円	純資産	資本金 200 万円	利 益 100 万円	資金調達合計 400 万円 (右側)
	負 債							
借入金 100 万円								
純資産								
資本金 200 万円								
利 益 100 万円								

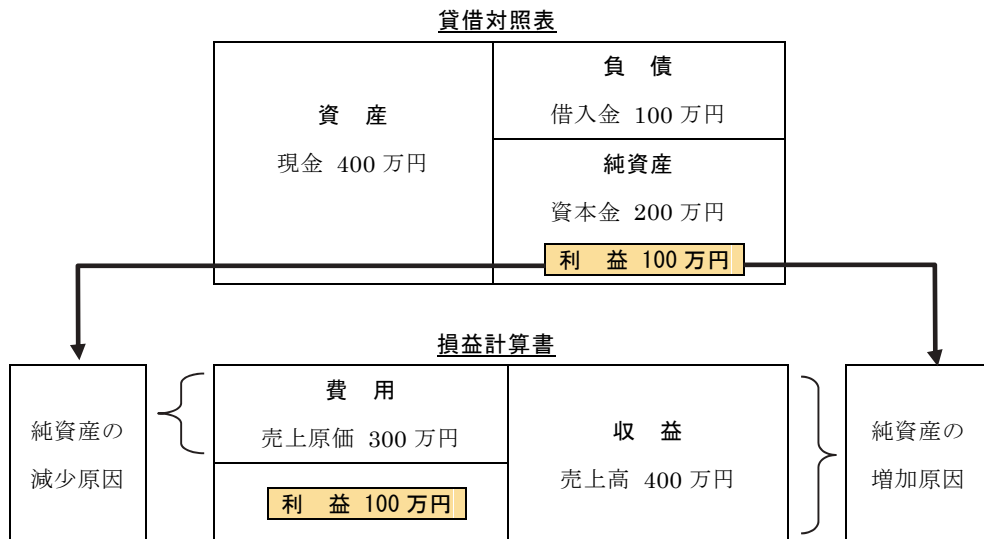
上記、貸借対照表の左側をみると、商品 300 万円から現金 400 万円と運用形態が変わり、かつ、資産が 100 万円増加している。また、これと相まって右側をみると負債と純資産の合計が 400 万円となり 100 万円増加している。この増加額 100 万円が利益（商品売却額 400 万円－仕入額 300 万円＝利益 100 万円）であり、純資産の増加として貸借対照表では把握される。この意味で、純資産の構成要素は、原則的には「元手+利益」ということになる。

**イ 貸借対照表と損益計算書の関係**

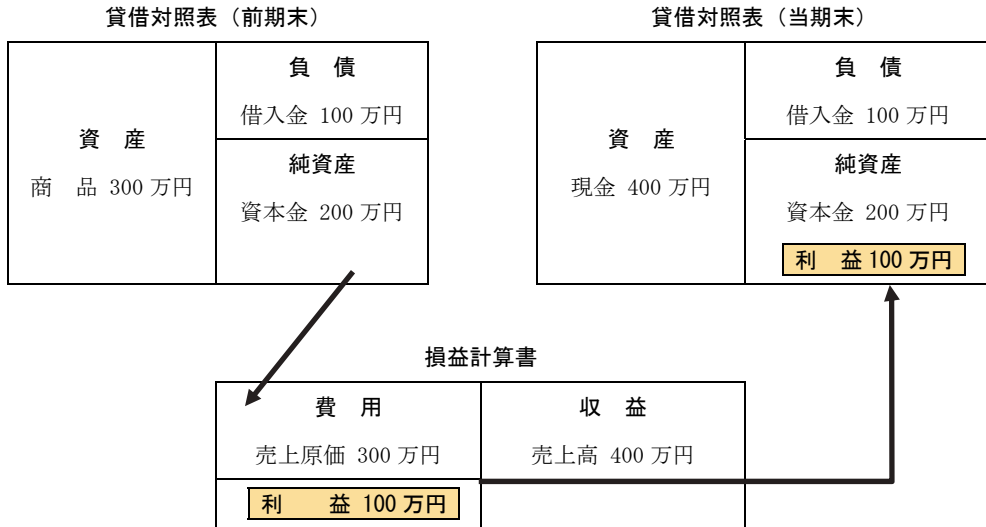
上記の計算例において、貸借対照表によって、会社設立時（計算例①）と設立後（計算例②）の純資産の増加額として利益 100 万円を計算した。しかし、この利益は純額\*で算定されているため、会社の経営活動の結果、売上高はいくらで（純資産の増加原因となる）、コストはいくらなのか（純資産の減少原因となる）ということは、貸借対照表では判明しない。

※ 純額とは控除後の残額のこと。ここでは売上-費用=利益の利益部分のみであることを指す。純額に対して控除前（売上、費用）のものを総額という。

そこで、純資産について、その増減の内訳が分かるようにするために、「純資産の増加原因」を「収益」とし、「純資産の減少原因」を「費用」として分割する。この「収益」と「費用」という要素を使うことで損益計算書を作成することができ、利益算定の内訳（経営成績）を知ることができる。



収益と費用は純資産がその増減原因によって分かれたものであることから、貸借対照表の純資産の増減と損益計算書の利益は繋がっている\*。



※ 貸借対照表と損益計算書は利益を通して繋がっており、貸借対照表の純資産の増加と損益計算書の利益がイコールになる関係のことを「クリーン・サープラス関係」という。

### ・クリーン・サープラス関係とは

$$\text{当期純利益} - \text{配当} = \text{当期株主資本} - \text{前期株主資本}$$

となる関係のこと。つまり、純利益が配当もしくは株主資本（純資産）以外に流出しない状態をいう。

日本の会計規準は一致しないケースがあり、ダーティ・サープラスといわれている。